「認知症はお友達２」

2 月会員放談（2023 年 2 月 10 日）　荻原信吾

１．　はじめに

20 周年記念誌に「認知症はお友達」と題して、認知症について感じてきたことを書きましたが、本日改めてその話をいたします。

私は認知症の専門家ではありませんが、横浜市を退職後、十数年間高齢者介護の仕事をしたこと、また、15 年間夫婦で認知症の義母の介護をしたことから、認知症はお友達、と思うようになりました。

２．　我が国の認知症の現状と予測

ところで、令和 4 年の厚生労働白書によると、世界 1 の長寿国となった日本は、2012 年に 462 万人であった認知症が、2025 年には 65 歳以上の高齢者の実に 5 人に 1 人、700 万人になると予測されています

私の世代、いわゆる団塊の世代も高齢化し、元気な高齢者が激増、結果的に認知症になる人数も増えてきたのです。80 歳以上では 2 人から 3 人に一人が認知症になるという時代になったのです。

３．　義母の介護

臨家で耳鼻科を 50 年以上開業してきた義母は、80 歳で認知症との診断を受けて閉院しました。悪徳業者に騙されて高額事務機器を沢山買わされ、認知症と分かるまでは、自宅の電話が止められたりして大変でした。一人暮らしは無理になり、私の連れ合い・娘が毎日介護して在宅生活を続けました。その後、デイサービス、ショートステイを利用、在宅が厳しくなってからは、認知症対象のグループホームに入居しました。買い物や料理もスタッフと一緒に行うという、グループホームの設立理念に忠実な施設で、楽しく生活していました。希望の絵画教室へも娘と一緒に通って、立派な絵を晩年まで作成していました。認知症の人は、図形や絵画作成は無理、というのは誰にも当てはまるわけではないと思います。

認知症の物忘れについては、本人は「記憶にございません」が口癖で、忘れたことを説明

すると「そうかい」と納得する日々でした。

とても素直で楽しく過ごして、95 歳で脳出血で亡くなりました。

4．　介護施設での経験

退職後 4 年間、老人保健施設、デイサービス、認知症の専門診断機関等の複合市立施設（横浜市総合保健医療センター）に勤務、その後 2 年間は民間の介護保険各種サービス提供施設（ほほえみの郷）勤務、その後 8 年間、アルソックのグループ会社「アルソック介護」で介護施設の内部監査業務に従事しました。

その法人は横浜市内で最多の 30 以上のグループホームを開設しており、問題事案改善のため、全職員に「虐待防止アンケート調査」を毎年行っていました。

無資格者や若い初心者が夜勤時に問題を起こすことがありましたが、

各施設を巡回すると、入居者は楽しく日々ノンビリ生活していました。施設入居直後に帰宅したいと頑張るケースや、デイサービスへの通所を渋る例などがありましたが、慣れてくると皆さん楽しんでいました。カラオケ、習字、絵画、健康マージャンなど、正に老人クラブになっていて、「認知症とお友達」として過ごしていました。

介護保険スタート前、またその後マスコミなどでセンセーショナルに取り上げられたような難しい事例は、一時的な本人の怒りや興奮によるもので、長期間継続する訳ではなく、早々に落ち着いていました。

5．　長谷川和夫医師の言葉

20 周年記念誌で、認知症専門医の故長谷川和夫医師の言葉「僕は認知症になって、やっと認知症のことがわかった」を紹介しました。ご本人も認知症を患い、「デイの入浴サービスは王侯貴族の気分」「認知症は神様からの贈り物」と言っており、正に認知症をお友達として晩年を過ごし、大往生されました。

6．　「認知症はお友達」とする多くの意見

日本で高齢化が急速に進行した 2，30 年前から、認知症は大きな社会問題になりましたが、マスメディアの取り上げ方はセンセーショナルで認知症本人の立場に立ったものではありませんでした。

現在では介護保険制度が整備され、介護の現場でも要介護者の立場に立ったサービスの重要性が叫ばれるようになりましたが、「治さなくていい認知症」を書いた認知症専門の上田諭医師は、医療界、医師の対応が一番遅れていると指摘しています。70 歳以上であれば本人に認知症という必要もない、友達として暮らして行けばよいと言っています。

この他にも、同様の指摘をしている認知症の図書を紹介しますと、

① 杉山奈津子著「神様がつくった病（やまい）　おばあちゃんと私の認知症物語」**「ねえ、おばあちゃん、もしかして認知症は幸せな死を迎えるために神様がつくったのかもしれないね」**

② 「人間の証明」「悪魔の飽食」などミステリー小説で有名な森村誠一の著書「老いの正体　認知症と友だち」は著者が卒寿目前で認知症を患い、自らその実態を記録したものです。

③ 「治さなくてよい認知症」上田諭著　日本評論社　　２０１４年刊

“みんな、おばあちゃんの気持ちになってないじゃないの、だからおばあちゃんの心をこじらせてしまうのよ”（樹木希林主演の映画、2012 年「わが母の記」から、孫娘役；宮崎あおいの言葉）

④ 信濃毎日新聞取材班編「認知症と長寿社会、笑顔のままで」　2010 年

「**『誰かの世話になって生きていく』この当たり前の覚悟**を受け入れた時、長き老いを支え合う仕組みや社会的資源がもっと必要だということにも気付く、老いを否定しない世の中へ舵を切ろう。」

7．　結び

これまでの自分の経験並びに今紹介した多くの意見から、私は家族や連れ合いが認知症になっても、本人の立場に立って介護サービスを活用しながら旅立ちまで楽しく過ごせるようにしたいと考えるようになりました。

また、自分が長生きすれば認知症になる可能性も大きい訳ですが、心配することなく認知症を友達として、家族、地域の支援や介護サービスを受け、自分らしく楽しく過ごして行きたいと思っています。　　以上